アルフレッド・シュッツ

佐藤嘉一 監訳

明石書店、2018 年

星川啓慈◎大正大学文学部人文学科教授

はじめに

ワーグナーによるこの大著『アルフレッド・シュッツ』は翻訳書で500頁を優に超えるが、それでも、著者が書いた2600頁の原稿の20パーセントほどであるという。つまり、準備した原稿の上澄みだけの内容なのである。それだけ、凝縮された内容であり、かなり厳密な論述なので、気軽にスラスラ読める著作ではない。

それはさておき、評者は、これまでシュッツの論文・著作はかなり読んでいるが、それらの内容がどのように体系づけられるのかは、なかなか理解できなかった。もちろん、この大著を一読するだけで、シュッツの多方面にわたる主題の関連が即座にわかるわけではない。しかし、評者にとって、「そうだったのか！」「この理論の背景にはそういうこともあったのか！」などと、教えられることが山ほどあった。また、おぼろげながら、シュッツの全体像も見えてきたような気がする。

「昼は銀行員、夜は哲学者」であったシュッツだが、銀行員として激務をこなす一方で、その学問にかける真摯な姿勢・情熱などはひしひしと伝わってくる。アメリカにおいて現象学をさかんにしようと労を惜しまなかった姿も描かれているし、交友関係の記述も興味深い。60歳で亡くなったのは過労のせいだ、という見解にも納得した。

シュッツに影響を与えた人々

ワーグナーは実に多くの学者・哲学者とシュッツの関係を論じている。そうしたなかで、シュッツと「学術上の緊密な共同と〈生粋の友情〉の間で釣り合いのとれた関係」を長年続けたグルヴィッチ（第13章）や、シュッツと「共通する関心の中核部分を分け合うと同時に、根本的な哲学方針の部分では互いに対立」しながらも、たがいに友情をもちつづけたフェーゲリン（第12章）に多くの紙幅をさいている。シュッツの見解と２人の見解の一致点ならびに対立点を知ることで、シュッツの思索の過程が立体的に見えてくる。

シュッツは、ライプニッツをめぐって、そのグルヴィッチと遣り取りをしていたのだが、評者は「シュッツとライプニッツにはどんな関係があるのか？」と不思議に思った。評者は、個人的に、ベルクソン、ウェーバー、フッサール、ジェイムズの４人がシュッツに大きな影響を与えた思想家だと思っており、ライプニッツは念頭になかった。だが、著者はライプニッツに１章分の紙幅を割いているのだ（第15章）。

シュッツにおけるライプニッツの重要性

シュッツに歴史的関心はそれほどなく、彼が「西洋哲学の合理主義者の伝統のなかにあった」ことは理解できる。フッサールは近代哲学の開祖であるデカルトに注目したが、シュッツはデカルトを厳しく批判したライプニッツに注意を向けた。

その理由の一部について、ワーグナーは次のように論じている。

> シュッツは、フッサールの超越論的推論、部分的には同じく形相論的推論の…はっきりと支持しがたい事情が、その基盤の基本的欠陥にあることに気づいた。『危機』書のなかで、フッサールはデカルトにこれらの土台の歴史的根源があることを示した。しかし、シュッツの確信はデカルトの土台が不安定であり、デカルトの

21号_新刊旧刊（影浦　星川）.indd 6　2018/10/30 9:47

最初のそして最も厳しい批判者、ライプニッツの土台によって代替されるべきであるということであった。（第Ⅲ部への序言）

次に、フッサール、ベルクソン、ライプニッツの３人を比較しているシュッツの文章を引用したい。自我・知覚・選択・目的・可能性などにかかわるものであるが、次の引用は、これら３人の研究の相性が良い側面である。なぜなら、これらの問題をめぐる３人の理論はすべて、ある「決定」がなされてしまって、「何が起きたのかを後から再構成するのではない」ものだからだ。つまり、「意識の流れのただなか」のことについての理論だからである。

フッサールは不確かな問題的諸可能性の構成を様相化にしたがってあらゆる可能的選択として研究する。ベルクソンは複雑な時間のパースペクティブ（遠近法）の分析のなかで選択する経過それ自体を記述する。ライプニッツは決心の最終的決断（fiat）に至る種々の意志や意向の相互影響をフォローしている。３つの理論は収斂する。なぜなら、これらのすべては、まさにその選択をしようとしている行為者の進行中の意識の流れのただなかに並べられるからである。（第15章）

一言でいうと、「ライプニッツの認識と意志の理論はシュッツの現象学的心理学と合流した」ということになろう。

シュッツに対するライプニッツの影響はこの程度の引用で理解できるはずはないが、評者は「フッサールやベルクソンに加えて、ライプニッツがシュッツにとっていかに重要な思想家であるか」を本書によって教えられた。1934年頃、ヨーロッパで悲痛な状況にあったとき、アメリカの友人マハルプに「真の哲学者、ライプニッツを読む」と書き送っている。

シュッツとベルクソン

1982年に、ワーグナーがベルクソン時代のシュッツの原稿を翻訳し註釈をつけて、『生の形式と意味構造』出版したとき、評者はすぐに読んだのだが、当時はシュッツとベルクソンの関係がよくわからなかった。本書『アルフレッド・シュッツ』はその翌年に出版されたわけだが、第12章「ベルクソン」では、簡潔に、シュッツとベルクソンとフッサールの関係が述べられている。シュッツはベルクソンの「純粋持続」という「捉えどころのない現象自体を1つの概念に変換」した。言いかえれば、「純粋持続を１つの生の形式に、またその生の形式を１つの理念型に変換」したのである。それでも、ベルクソンの思索は、シュッツの「関連性の理論」「多元的現実の概念」「実用的・意志的行為の理論」に底流として流れている。

シュッツはベルクソンからフッサールへと研究の重点を移していくことになるが、フッサールがベルクソンに入れ代わることはなかった。すなわち、「フッサールはシュッツの現象学的心理学研究の中心をかち取りはしたが、ベルクソンがこれを実質的に補った」のである。そして、「シュッツの思索におけるベルクソンとフッサールの着想の一致点は、その全範囲に及んではいないものの、〔シュッツの思索における〕着想の基本線の大部分、そして高度に重要な部分を保証した」のである。

シュッツとフッサール

評者がもっとも感銘を受けたのは、第18章「フッサール――限界と批評」である。学生・大学院生時代にフッサールや現象学者の著作を読んで、素朴に「現象学的還元なんて本当にできるのかな？」「それが遂行できたことはどうやって保証されるのだろう？」などという疑問をもった。もちろん、これは、形相的還元や超越論的立場などに対する疑問でもあった。フッサールを研究している友人からは、「内世界的立場にとどまるシュッツなんてつまらない」「〈自然的態度の構成的現象学〉なんて成立するはずがない」などといわれたのを、懐かしく思い出す。シュッツは超越論的立場を批判し、その立場にたつことを拒否するから、シュッツのフッサール批判を知らない現象学

21号_新刊旧刊（影浦　星川）.indd 7 2018/10/30 9:47

者一般からは評価されないであろう。これは当然のことかもしれない。

しかし、本書を読んで改めて感じたことは、「シュッツはフッサールの議論を知悉したうえで彼を批判している」ことである。ワーグナーは、大きく２つの事柄について論じている。⑴シュッツの実際の現象学的関心は現象学的心理学に関係する事柄に限られ、彼の批判がフッサールの超越論的現象学一般へと広がること、⑵シュッツの社会学的関心の中心になった超越論的現象学の間主観性理論についての批判を、彼が展開することである。

シュッツとフッサールの関係は複雑だし、時間の経過とともに変化する。また実際に、シュッツはフッサールを執拗に批判している。だが、その一方で、シュッツは次のことをいつも明確に自覚していたのである――「フッサールを乗り越え、そして本当にフッサールから離れる自分の批判的な歩みが可能であったのは、唯ひたすらにフッサールがさまざまな問題を提起し、天才的な強靭な精神でこれらの問題を追及していたからである」。すなわち、ワーグナーがいうように、「フッサールの思索の諸成果は、シュッツがこれらの諸成果に見出した一定の形式や内容をそこから切り分け識別しなければならなかったとしても、シュッツと一緒に生き残った」のである。

シュッツのフッサール批判が的外れでないことは、1957年にパリに近いロワヤモンで開かれたフッサール・コロキアムで「フッサールにおける超越論的間主観性の問題」を発表した時の様子からも分かる。フッサールの超越論的現象学の重要部分の論駁を構想したこの論文の内容にもかかわらず（後述）、シュッツに対して学識ある現象学者たちから何の反論もなかったのである。それどころか、インガルテンはシュッツの述べた「基本点」を承認し、フィンクは自分の見解はシュッツのものと「完全に一致する」と述べたのである。

自然的態度の現象学

1945年に、シュッツはスピーゲルバーグへの手紙のなかで「私の本分は世界に対する自然的態度の現象学に自分を限ることです」と書いた。そしてさらに、「あらゆる職業的現象学者たちによる自然的態度の現象学の軽視に直面しますから、まだまだたくさんすることがあります」とか「私はいよいよもって社会的なるものの起源は超越論的領域にはなく、もっぱら自然的領域にあるという確信に達します」とも書いた。ここで注目すべきことは、シュッツは、⑴「自然的態度の現象学」という自分の立場を明確に意識し、⑵それに対する「職業的現象学者たち」による軽視・批判を予想し、⑶フッサールに対する「社会的なるものの起源は超越論的領域にはない」という将来展開される批判をしていることである。

ところで、シュッツに大きな影響を与えた人物として、これまで上で言及してきた人物以外に、シェーラーもあげることができよう。彼には「形相的知識の機能化」という構想がある。これは「形相的還元を実行し、また形相的諸本質を直観する主体が、依然として社会的存在のままであること、つまり、彼の生活世界の諸現実の内部に生きる一存在であること」を主張している。「形相的知識」は現象学者たちの知識であり、彼らはこの知識を自分たちの日常的な知識や一般的に「科学的」知識を判断中止することによって手にする。だが、シェーラーの考えでは、彼らは自分たちの諸経験の基礎的諸様態を同様に判断中止する手段をもたないのである。すなわち、「現象学的に還元されているものは相変わらず彼らの非反省的生活の基盤から生じた」のである。そうであれば、シェーラーは、実質的に形相的洞察が普遍的でも包括的でもないことを、明らかにしたことになろう。たしかに、現象学者は生活世界を超越しているかもしれないが、彼らは生活世界を廃棄できないのである。ワーグナーは、この文脈では、「基本的に、シュッツの現象学は形相的であった」と述べているが、評者は、シュッツはこうしたシェーラーの見解に完全に同意すると思う。

超越論的現象学批判

1943年に、フェーゲリンが『危機』研究の最初の２巻を槍玉にあげたとき、シュッツはフッサールを擁護したのだが、次のように付け加えた

21号_新刊旧刊（影浦　星川）.indd 8　2018/10/30 9:47

――「はっきり告白しますが、私は自分を超越論的現象学の一擁護者にすることはできません。それが決定的な点で失敗しているのではないかと思うからです」。

その『危機』書の出版は1954年であるが、シュッツにとってこの出版は、フッサール批判の開陳や自身の研究の励みになったことは間違いない。彼は超越論的現象学の３つの側面について批判を展開した。⑴フッサールの超越論的自我論、⑵超越論的現象学を「超越する」傾向、⑶超越論的間主観性の問題である。以下では、⑶に焦点をあてながら、ワーグナーの議論を追っていきたい。

前出のロワヤモンで発表した論文の準備中に、シュッツはスピーゲルバーグに「ぼくは〔フッサールの〕超越論的哲学には同行できないんだ。ぼくは内世界的な現象学をやるしかない」と述べたそうだ。これはワーグナー宛ての手紙にある話だが、ワーグナーは「シュッツは、そのとき、フッサールの諸理論の相当部分を彼の哲学の本体から切断することを決意した」という。ワーグナーは、シュッツに同意して、「〈間主観性〉を人間たちの間の人間存在として世人の存在が密接に相互に関係し合う、最も基礎的な諸特徴の複合体を指す現象心理学の１つの用語」として理解するという。やや飛躍があるかもしれないが、「間主観性は全くの所与だ」ということであろう。

時間がたつにつれ、シュッツはフッサールの「超越論的間主観性の問題」を「間主観性の一問題」として考えなくなり始めた。この「問題」の組み立てと前提が疑わしくなったのだ。「問題」自体が問題になってしまったのである。

1948年、シュッツは「サルトルの他我理論」について論じた。そのなかで、「世界の構成の源泉としての例の超越論的自我の観念と、複数の共存する超越論的諸主体の観念とを調和させることは…現象学の最も困難な問題の１つであり――おそらく解決不可能の問題である」とか「フッサールがいかにして他者は構成されるかを説明するかぎり、彼は他者を〈内世界的心理学的統一体〉として取り上げている」と述べている。

1957年のフッサール・コロキアムで発表した論文「フッサールにおける超越論的間主観性の問題」の最後で、シュッツは超越論的自我と超越論的他者の間に関するさまざまな追加的説明が、『危機』書のなかで、初期フッサールの立論の諸難点をさらに倍加したことを示した。主要な難点として、次のようなもの（４つのうち３つ）が挙げられている。⑴超越論的還元においては、「いかなる超越論的共同態、いかなる超越論的我々も絶対に構成されない」。⑵「複数の超越論的自我」という表現は疑問に付されねばならない。超越論的自我は「もっぱら単数形で考えられる」。⑶「超越論的間主観性の構成」は、「私、省察する哲学者」によって行われる。この者は、超越論的還元のあと、「ある独特の哲学的孤独」において存在するが、同じく他者たちとの共同態において超越論的エポケーを行うとも述べられている。いかにしてこのようなことが可能であるか。

シュッツは、フッサールの間主観性をめぐる自分の批判的評価が適切であることを確信していたが、コロキアムにおける学識ある聴衆の反応に不安も懐いていただろう。だが、先述したように、インガルテンやフィンクを始め、聴衆からは何の反論もなかったのである。シュッツはフッサールの超越論的立場を採用せず、内世界的立場にたち続けたが、それはフッサールに造詣の深い現象学者たちからも認められたことだったのである。

シュッツと宗教学との関係

宗教学を学んでいる評者の修士論文は「現象学的宗教社会学」について論じたもので、シュッツ、バーガー、ルックマンの理論を主として扱った。評者はバーガーとルックマンによる『日常世界の構成』は何度も読み返し、高く評価している。だが、スピカードは、２人はサムナーやデュルケムの目を通してシュッツを読んでいる、と批判している。つまり、このことは「宗教体験」をめぐる現象学的考察を妨げるというわけだ。基本的に、評者はこの批判に賛成する。

評者はこれまで、『悟りの現象学』（1992）などにおいて、宗教現象の分析にシュッツの「多元的現実論」「知識論」「関連性論」「象徴的間接呈

21号_新刊旧刊（影浦　星川）.indd 9　2018/10/30 9:47

示論」などを持ち込めないか、と思案してきた。そこで当然、シュッツ自身が宗教についていかに考えていたかが問題となるが、残念ながら、彼の著作全体において、宗教はあまり（ほとんど）登場しないといってよい。

シュッツは『社会的世界の意味構成』（1932）を執筆するにあたって、ウェーバーの諸著作にあたっているが、世界の諸宗教の歴史的・社会的研究を収める『宗教社会学論集』（全３巻）に、シュッツが飛びついたかどうかは「知られていない」。

ワーグナーの著作を読むと、その可能性は低いように思われる。その傍証として、例えば、次の２つのことをあげることができよう。⑴フェーゲリンとの遣り取りで、「シュッツは宗教的知識を思想家たちの正当な関心の一領域として認めたが、社会科学の諸領域に基本的に宗教的・倫理的見解が侵入することには頑なに反対した」こと。⑵ナタンソンは「シュッツの付帯現前の理論が〈象徴の究極の水準〉を構成する〈神秘主義の分析のための興味深い基盤〉を提供している」と指摘したのだが、シュッツはこの指摘をそれほど心にとめなかったこと（ただし、評者はナタンソンの言葉は正鵠を射ていると思う）。

残念ながら、評者の「ワーグナーの著書で、シュッツ自身の宗教観はいかなるものか、彼は学問的に宗教をいかに捉えているか、などについて少しは論じられているのでは…」という期待に応えてもらうことはできなかった。だが、シュッツの理論を宗教現象の分析に応用することは充分に生産的なことである。

たしかに、わが国では「多元的現実」の１つとして宗教が挙げられることは多いが、シュッツ理論の宗教学への本格的応用は、管見では、まだそれほどさかんに行われてはいない。しかし、最近、*Human Studies*（vol. 40, issue 4, 2017）が〝Alfred Schutz and Religion〟という興味深い特集を組んだ。評者も、ウィーン大学のシュタウディグル博士との共著論文だが、〝A Schutzian Analysis of Prayer with Perspectives from Linguistic Philosophy〟という論文を寄稿している。

シュッツ自身がこうした特集をどう評価するかは不明である。けれども、自分の仕事が後世に引き継がれて豊かな果実を提供しているとすれば、学問としての宗教学に「宗教的・倫理的見解を侵入」させていない限り、宗教現象を分析する方法として自分の理論が使用されていることを喜ぶのではないだろうか。

ワーグナーは「結びの言葉」で、シュッツの仕事は「１つの課題、１つの委任事項として私たちと彼の後継者たちの前に置かれている。彼が始めたことを、私たちは何としても続けなければならない」と述べている。そうであれば、学問としての宗教学において、シュッツの理論を宗教現象の分析に応用することは、宗教学者に与えられた「委任事項」なのだから、彼も喜んでくれるに違いないのである。

おわりに

評者はシュッツについての海外の研究書（バーバー、コックス、ゴーマンなどによるもの）もそれなりに読んだのだが、恥ずかしながら、本訳書が刊行されるまで、本書の存在は知らなかった。監訳者の佐藤氏は、最後に、本書の翻訳の決定をめぐってワーグナーからきた「貴方〔佐藤氏〕をこの伝記の訳者として選ぶのは最高です」という手紙を紹介している。その日付は、1983年12月16日である。つまり、なんと35年も前の話である。評者としては、もっと早くこの翻訳を出版していただきたかったと痛切に思う。しかし、35年たっても本書の価値は失われないし、わが国における今後のシュッツ研究にとって本訳書が出版されたことの意義が大きいことに何らの疑いもない。

21号_新刊旧刊（影浦　星川）.indd 10　2018/10/30 9:47